

非接触ヒーリングの方法とヒーリングパワー (Controlled Healing Power and Ways of Non-contact Healing)

小久保秀之、山本幹男
(Hideyuki KOKUBO and Mikio YAMAMOTO)

国際総合研究機構 生体放射研究室 (日本、千葉)

要旨: 白いぼキュウリの切片 (実験試料) に 30 分間非接触ヒーリングを行った後、実験試料から生じる極微弱生物光をヒーリングしなかった対照試料とともに 18 時間測定した。2008 年 6 月~12 月に行ったキュウリシリーズ 7 で、種々の流派のヒーラー 24 名 (初心者 10 名、中堅・ベテラン 14 名) を各 2 回ずつ測定した結果、制御されたヒーリングパワーの指標である J 値は、平均 0.084、95%信頼区間±0.026 (n=24) であった。初心者群 (J=0.081) と中堅・ベテラン群 (J=0.086) の間には有意差はなかった。J 値と相関した変数は年齢だけであった ($r=-0.487$, $p=0.016$, 両側)。詳細な解析から、1 回目と 2 回目の J 値の増減は、被験者の性格特性のうち利発性因子と弱い正相関が ($r=0.466$, $p=0.022$, 両側)、また、ヒーリング方法のうち「愛の心」(神仏や精霊への祈りを含む) の使用程度の増減と弱い正相関があった ($r=0.417$, $p=0.043$, 両側)。利発的な被験者は比較的うまく実験状況に対応できると考えられた。「愛の心」の増減は中堅・ベテランで顕著であり、この方法に被験者が慣れていることを意味すると考えられた。
キーワード: 非接触ヒーリング、方法、因子分析、ヒーラー、定量測定、バイオフィトン、白いぼキュウリ

1. はじめに

筆者らは、2006 年以来、手かざしなどの非接触ヒーリング効果の定量測定に取り組んでいる¹⁻¹²⁾。この方法は、白いぼキュウリの切片 (実験試料) に 30 分間非接触ヒーリングを行った後、実験試料から生じる極微弱生物光 (バイオフィトン) をヒーリングしなかった対照試料とともに 18 時間測定し、発光強度の差異でヒーリング効果を検出する。これまでに、非接触ヒーリングは手の熱や影のせいではないこと^{1-3,5)}、磁気刺激や微弱電磁波の作用はヒーリング作用とは似ていないこと⁹⁻¹²⁾、ヒーリング能力は生物学的な根拠をもっていると考えられること⁴⁾、さらに発光はアスコルビン酸の酸化反応や緑の香の生合成反応によって生じること⁷⁾を報告した。

本研究は、ヒーリング効果と、ヒーラーの性格特性、ヒーリング方法との関係をより詳しく調べることを目的に実施した。

2. 方法

小久保秀之 kokubo@a-iri.org 国際総合研究機構
263-0051 千葉県千葉市稲毛区園生町 1108-2 ユウキビル 40A
Phone: 043-255-8851 FAX: 043-255-8852

2.1 バイオフィトン測定装置

キュウリ試料の作成とバイオフィトンの測定は、著者らの開発した標準測定法で行った¹⁻⁵⁾。バイオフィトンの測定には、浜松ホトニクス製の I.I.カメラ Model C2400-47、感度 60mA/W at 400nm、波長域 280-650nm を用いた。レンズから試料までの距離は 250mm であった。また、試料の乾燥速度を均一化するために、保湿剤として活性炭粉末ゼリーの付いた脱臭剤 (New キムコジャイアント、小林製薬) を暗箱に入れた。実験は室温 24°C で行った。

2.2 期間・場所

実験は 2008 年 6 月~12 月に、国際総合研究機構 生体放射研究室で行った。当初は、9 月末までにヒーラー 30 名を各 2 回測定する予定であったが、予定人数に達しなかったため期間を延長した。白いぼキュウリを生体センサとして使う本測定法では、厳冬期の測定が困難なため、12 月中旬で本シリーズ (キュウリシリーズ 7) の測定を打ち切った。最終的に 24 名 (各 2 回) の有効データが得られた。

2.3. 被験者

被験者は、当研究所に登録の実験協力者、インターネットによる公募、被験者・協力者による紹介によって集めた。

被験者は実験応募時に、A 群：経験年数 3 年未満、または実践例 100 人未満、B 群：経験年数 3 年以上、または実践例 100 人以上のいずれかの群で応募した。A 群は初心者で 10 名（男 4 名、女 6 名）、B 群は中堅・ベテランで 14 名（男 11 名、女 3 名）であった。ヒーラーの年齢は 27 歳から 70 歳までで、平均年齢は 49.1 歳（SD=12.9）であった。22 名は日本人、アメリカ人とイスラエル人が各 1 名であった。

各ヒーラーが実験時に使っていたヒーリングの流派名は、波動電位交換（4 名）、岡田式浄化療法（3 名）、遠隔療法（3 名）、気療（2 名）、リコネクションヒーリング（2 名）、自己流を含むその他（10 名）であった。

2.4 実験指示

ヒーリングは、試料を切り出して 10 分以内に開始し、容器に触れずに 30 分間行った。施術者には次のように指示した。

「このキュウリは今切ったばかりです。新鮮で元気のいいキュウリほど、よく光ります。キュウリが元気になるように、よく光るようにヒーリングしてください。」

「手の熱が伝わったり、中のキュウリが動いてしまうので、直接ペトリ皿に触らないでください。」

「15 分たったら合図しますので、もし続けるのが辛いようなら終了してください。できるだけ 30 分間たっぷりヒーリングしてください。」

15 分経過時「15 分たちました。続けても大丈夫ですか？ では、キュウリが元気になるように、よく光るようにヒーリングしてください。」

2.5 手続き

被験者は、研究所に到着後、実験内容の説明を受けた後、同意書に署名した。パワーグッズ類を装着している場合は取り外した。試料作成後、被験者は室内光の下で、30 分間実験試料を入れたペトリ皿には直接触れずにヒーリングを行った。対照試料は 3m 以上離れた場所に静置した。

ヒーリング終了後、実験試料と対照試料のペトリ皿のふたを取り、バイオフィオンの測定を 18 時間行った。

被験者は、当日の実践内容を実践記録用紙に回答した。また、ヒーラー情報記録用紙にその場で回答するか、あるいは持ち帰って記入し、2 回目の測定時に持参した。実践記録用紙とヒーラー情報記録用紙は、2007 年に用いたもの^{4,6)}と同じものを使用した。

さらに、一部の被験者には予感実験などの別種の実験を行った。

2 回目の測定は、翌日以降に、被験者の都合の良い日に行った。被験者到着後、簡単な打ち合わせを行い、直ちにヒーリングを実施し、終了後、バイオフィオンの測定と実践記録の回答を行った。また、一部の被験者は予感実験など別種の実験も行った。

3. 分析

3.1 J 値

実験試料のキュウリの発光強度がどれくらい大きくなったかで、制御可能なヒーリングパワーの大きさの目安となる。キュウリ個体ごとに、もともとの発光強度が異なるため、実験試料と対照試料の発光強度の比を試料対ごとに算出し、その比の自然対数を求める（J 値）。

$$J = \ln(I_E / I_C)$$

測定 2 回（n=8）の J 値を、そのヒーラーの能力の代表値とした。また、詳細検討の場合は、毎回の測定値 J(4)を分析に用いた。

3.2 統計解析

統計解析には、エクセル統計 2006（社会情報サービス社）を用いた。

4. 結果

4.1 J 値

Table 1 に、後述の分析結果とともに、各ヒーラーの測定値を示す。

制御されたヒーリングパワーの指標である J 値は、被験者全体で平均 0.084、95%信頼区間±0.026（n=24）であった。初心者群（J=0.081）と中堅・ベテラン群（J=0.086）の間には有意差はなかった（t 検定, p=0.414, 片側）。また、J 値と直接関連した変数は年齢だけであった（r=-0.487, p=0.016, 両側）。

Fig.1 は、各ヒーラーの J 値とその 95%信頼区間を示したものである。J=0.10 から 0.15 に山があり、J=0 に向かって裾野が伸びる非対称の分布になった。本シリーズの被験者は腕に覚えのある初心者が多かったと考えられる。

Fig. 2 は、各ヒーラーの毎回の測定値 J(4)とその増減を示したものである。高いレベルで 2 回ともほぼ同じ能力を示したヒーラーは（図中の矢印）、2 名ともベテランであった。この 2 名は極めて能力の安定した熟練者と考えられる。他のヒーラーは 2 回の測定で変動が見られた。

Table 1 キュウリシリーズ7の結果 (まとめ)

群	被験者番号	性別	年齢	J 値	SD	95%信頼区間	性格特性の因子得点			J(4)			やり方の差 愛の心
							因子 1	因子 2	因子 3	1 回目	2 回目	差	
A	I001	m	70	-0.037	0.112	0.094	0.36	0.09	-0.62	-0.053	-0.022	0.031	-1
	M004	m	31	0.108	0.150	0.126	-2.50	-2.84	1.90	0.127	0.090	-0.038	1
	Y004	m	31	0.174	0.125	0.104	-0.64	1.22	-1.52	0.202	0.146	-0.056	0
	S011	f	27	0.121	0.141	0.118	-0.35	-0.37	0.20	0.168	0.074	-0.095	0
	K014	f	66	0.128	0.060	0.050	1.97	-0.31	1.14	0.061	0.186	0.125	0
	M006	f	35	0.124	0.231	0.193	0.47	0.74	0.19	0.105	0.151	0.046	0
	K015	f	66	0.127	0.181	0.152	0.69	0.54	0.20	0.066	0.188	0.122	0
	S013	f	64	-0.052	0.134	0.112	0.67	0.06	2.27	-0.039	-0.064	-0.026	2
	M007	f	44	0.062	0.133	0.111	1.40	0.53	0.96	0.020	0.104	0.084	0
	L001	m	44	0.050	0.117	0.098	-1.59	1.67	0.78	0.079	0.021	-0.058	0
B	K013	m	45	0.163	0.098	0.082	0.42	-0.35	-1.13	0.165	0.161	-0.004	-3
	U003	m	70	0.005	0.107	0.090	0.15	-0.77	-0.66	-0.020	0.031	0.051	0
	M003	m	44	0.089	0.103	0.086	-0.12	-0.90	-0.81	0.158	0.021	-0.137	-3
	K010	m	54	0.097	0.144	0.120	0.82	-0.48	0.48	0.039	0.155	0.116	1
	T009	m	61	0.124	0.158	0.132	0.05	-0.47	-0.96	0.071	0.178	0.107	0
	O003	f	61	0.094	0.128	0.107	1.10	-0.13	-0.66	0.145	0.042	-0.103	-5
	M005	m	39	0.174	0.168	0.141	-0.90	1.46	1.10	0.151	0.197	0.046	0
	S012	f	43	0.145	0.153	0.128	-0.49	0.87	0.55	0.180	0.111	-0.068	-3
	T010	m	38	0.108	0.106	0.088	0.52	-1.04	0.09	0.107	0.109	0.002	-2
	I002	m	43	0.047	0.198	0.165	0.52	-0.18	-0.58	-0.045	0.138	0.183	0
	N007	f	53	0.028	0.173	0.145	-1.02	0.20	-0.83	0.030	0.026	-0.005	-3
	F004	m	42	0.034	0.161	0.134	0.33	-1.38	-1.20	0.007	0.061	0.053	-2
	T011	m	55	0.092	0.212	0.177	-0.24	1.47	0.34	0.073	0.110	0.037	4
	P001	m	53	0.009	0.126	0.105	-1.64	0.38	-1.23	0.030	-0.012	-0.042	-2

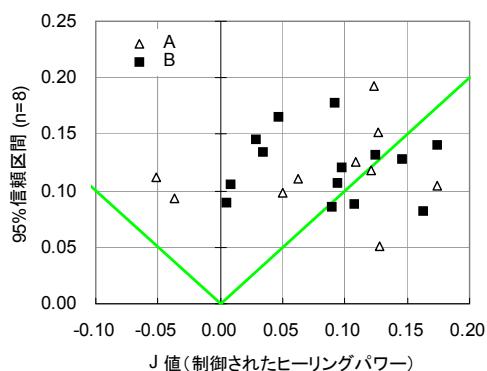


Fig. 1 J 値と 95%信頼区間

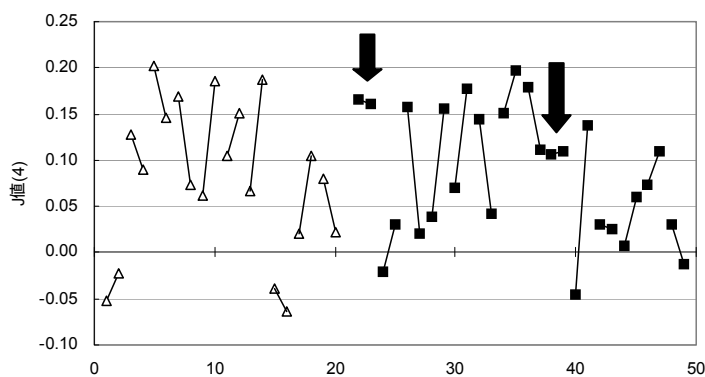


Fig. 2 被験者ごとに示した 1 回目と 2 回目の J(4) 値の増減

全体ではA群とB群の変動幅は同程度であったが、個別に見ると、変動の非常に大きなヒーラーもいた。変動の理由として、測定誤差だけでなく、毎回同じようにヒーリングできないこと、また、特にベテランは、せつかく2回も測定するチャンスがあるのだから、色々なやり方を試してみたいという人や、1回目のJ値が小さかったので、ええ〜とびっくりして2回目は気合が入ったなど、色々な人がいたためと考えられる。

4.2 性格特性とJ値の増減

J(4)の増減と関連する要素を調べるために、被験者の性格特性(18項目、9件法)を因子分析した(Table 2)。因子分析で抽出した3因子を、因子1から順に、利発性因子、引っ込み思案因子、負けず嫌い因子と呼ぶことにする。

Table 2 性格特性3因子の因子負荷量
共通性の推定の初期値1、バリマックス回転。

変数名	因子1	因子2	因子3
せこせこーのんびり	0.79	0.31	0.10
革新的ー保守的	0.73	-0.41	0.05
権力的ー従順的	0.73	0.15	-0.08
話し好きー聞き上手	0.69	-0.17	0.17
独創的ー非独創的	0.67	-0.26	-0.22
分析的ー直観的	0.62	0.35	-0.30
そそっかしいー慎重	0.53	0.21	0.14
神経質ーおおらか	-0.09	0.71	-0.07
内向的ー外向的	0.23	0.68	-0.02
恥ずかしがりー外交的	0.08	0.67	0.12
不安定ー安定	0.39	0.63	0.32
遵奉者ー革命家	-0.37	0.51	-0.24
謹厳ー柔軟	0.02	0.29	0.78
感情的ー理性的	0.03	0.09	0.75
競争好きー協調的	0.19	-0.28	0.69
夢想的ー現実的	-0.29	-0.02	0.59
衝動的ー自制的	0.27	-0.43	0.53
速いー遅い	0.40	-0.39	-0.42

Table 3 ヒーラーの因子得点と諸要素との相関係数

相関係数	因子1	因子2	因子3
J値	-0.014	0.128	-0.014
1回目	-0.269	0.105	-0.054
2回目	0.244	0.114	0.026
差	0.466 *	0.006	0.073
AB点	-0.042	-0.112	-0.466 *
年齢	0.429 *	0.054	-0.036
愛の心の差	-0.044	0.174	0.520 **

* 両側5%有意

利発性因子(因子1)はJ(4)の増減と弱い正相関があった($r=0.466, p=0.022$, 両側)。年齢とも弱い正相関があった($r=0.429, p=0.036$, 両側)。

引っ込み思案因子(因子2)は、他の要素と有意相関を示さなかった。

負けず嫌い因子(因子3)は、A・B群の属性の違いを2値化したAB点と弱い負相関が($r=-0.466, p=0.022$, 両側)、また後述の技法「愛の心」の使用程度の増減と中程度の正相関があった($r=0.520, p=0.009$, 両側)。

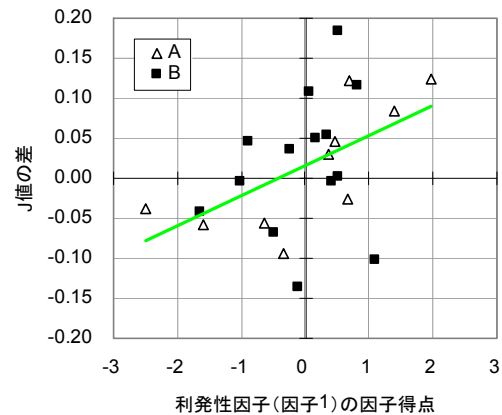


Fig. 3 利発性因子得点とJ(4)の増減

4.3 ヒーリング方法の変化とJ値の増減

ヒーリングの方法は、記述式回答の他に7件法で、意志力・願望、視覚化・想像力、記憶・連想、意識集中と傾注、愛の心(神仏や精霊への祈りを含む)、意識の変容(トランス状態)、弛緩と意識の拡散、その他の8項目の使用程度を調べた。

技法の使用程度とJ値とは相関しなかったが、J(4)の増減と技法「愛の心」の使用程度の増減と弱い正相関があった($r=0.417, p=0.043$, 両側)。

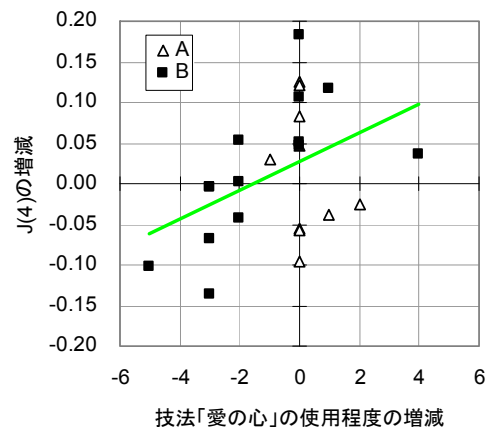


Fig. 4 技法「愛の心」の増減とJ(4)の増減

ただし、この傾向は初心者 A 群では見られず ($r = -0.261, p = 0.466$, 両側)、中堅・ベテラン B 群で顕著であった ($r = 0.659, p = 0.010$, 両側)。

また、利発性因子得点と技法「愛の心」の使用程度の増減とは相関しなかった ($r = -0.044$)。

5. 考 察

5.1 初心者

キュウリシリーズ7では、腕に覚えのある初心者が多かった。初心者であっても、毎日実践している者は中堅並みの値を示した。公募型の実験では純粋な初心者を集めるのがむずかしく、ヒーリング能力の生物学的仮説⁴⁾の検証は容易でない。同仮説の検証には、まったく経験の無い被験者を無作為抽出して選び、訓練を施す前後で測定するしかないと思われる。

5.2 制御可能なヒーリングパワー

本測定では、実験試料と対照試料との距離は3m～5mで、対照試料は直接目視できない場所に静置してある。過去の実験結果は学会やWebで情報を公開しており、また事前に実験内容を説明するので、ヒーラーは対照試料の存在を知っている。ヒーラーによっては、周囲全体に影響が及ぶので対照試料にも影響してしまい差が出なくなると主張する。確かに、本測定法は、目前の実験試料に影響を集中できなければ何も測定できない。すなわち、半径1m程度の領域に影響を集中させるといふ、最低限の制御ができなければ大きなJ値は検出できない。実際には、本シリーズを含めて、これまで約40名のヒーラーの大半で問題無く測定できたので、実験試料と対照試料の距離は3m程あれば十分と思われる。

しかし、ポルターガイスト現象の反復性偶発性念力(RSPK)のように、パワーが非常に強いのに、意識的な制御がまったくできない超能力現象も存在する。つまり、ある日突然、非常に強い能力が目覚めたというRSPK型のヒーラーは、パワーが強くて意識的な制御ができない可能性がある。実際に制御できないのか、それとも本人の思い込みなのかは、事前の聞き取りだけでは判断できない。こういうヒーラーの場合は、最初に3mで実験した後に、対照試料をさらに遠くに離して実験する必要がある。

5.3 性格特性因子

因子得点そのものはJ値と相関しなかったが、これはある程度予想された事柄である。ヒーリングパワーの源はヒーラーの肉体にあり、意識は源ではないと考えられるからだ。利発性因子得点の

大小がJ値の増減と正相関したことから、利発的な被験者は比較的うまく実験状況に対応できた。すなわち、実験そのものに慣れた、人間ではなくキュウリにヒーリングすることに慣れたと考えられる。現在、毎回のヒーリング実践の詳細分析を進めているが、慣れによって何が変化したのか特定できていない。質問項目の設定がそもそも適切でなかった可能性もあり、設問の見直しを含めて、さらに検討が必要である。

5.4 技法「愛の心」

技法の使用程度そのものはJ値と相関しなかったが、ヒーリング技法「愛の心」の使用程度の増減が中堅・ベテランで顕著であった。これは、中堅・ベテランが「愛の心」でヒーリングすることに慣れているからだと考えられる。

技法についても、実際にヒーラーが行っている事柄を的確に把握できていない。設問の抜本的な見直しが必要である。

5.5 ヒーリング方法の変更

本シリーズでは、大半の被験者に1回目の結果を示し、2回目のヒーリングのやり方をどうするか話し合った。たとえば、あるベテランは、1回目の測定で普段通りにヒーリングしたが、J値がほとんどゼロだったため非常に驚いていた。しかし、このベテランも実験に合わせたヒーリング方法を話し合った結果、2回目は非常に良いJ値を出すことができた。おそらく、力が強いと言われるヒーラーは、実際にパワーが大きい者もいるが、力の使い方が上手で小さなパワーで大きな効果を上げている者も相当数いるのだろう。本測定法はパワーしか測定できないので、上手なヒーラーが普段と同じやり方でヒーリングしてもJ値は大きくならない。

シリーズ全体を通じて得た感触では、1回目のJ値が小さかったヒーラーには、次のように説明するのが有効と思われた。

1. この測定はパワーしか測定できないので、実際にパワーを出してください。
2. 目的は光を強くすることなので、それを忘れずに。
3. ヒーリングしたら光るのではありません。光るようにヒーリングするから光が強くなるのです。もし光が弱くなるようにヒーリングしたら、たぶん、光が弱くなります（発光を弱くする実験は実施していない）。

このうち、最初のパワーを出すということの説明がむずかしい。

この場合のパワーを出すとは、力むことではありません。ふだん、我々が手を動かすときに「動かそう」などと思ってから手を動かしたりはしません。手が動くイメージをいくら頭の中に思い描いても、実際に手を動かさない限り手は動きません。ヒーリングパワーも同じで、パワーが出るから出しているだけで、パワーが出る視覚イメージを作ったり、「出る、出る」と念じることではないのです。

このように、ヒーリングを運動機能のようなものとして説明すると、2回目のJ値の向上に有効が多かった。ただし、神降しでヒーリングするシャーマン型のヒーラーや、パワーという考え方以外の方法に慣れているヒーラーには、この説明はあまり有効ではなかった。

なお、ヒーラーがパワーを出す・出さないを制御できることは、本シリーズ以前に確認済みである。Fig. 5はその1例で、呼吸法の熟練者F003が、実験試料の前に立って呼吸法で場の状態を変えることでヒーリングした場合と、椅子に座って手かざしのポーズだけをして呼吸法を使わなかった場合(パワーを出さなかった場合)の比較である⁶⁾。確かにヒーラーはパワーの制御ができる。

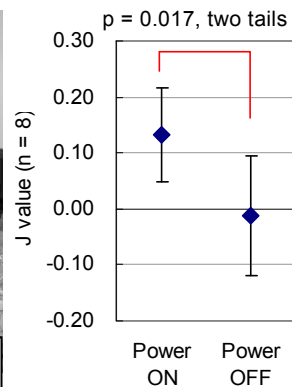
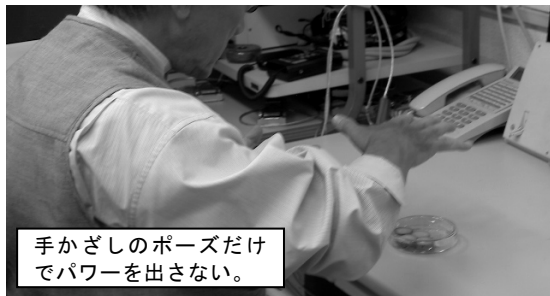


Fig. 5 呼吸法の熟練者F003によるパワーの制御
小久保・山本、2007より⁶⁾

5.6 制御可能なヒーリングパワーと安定度

Fig. 1 から、ヒーラーのパワーの階級分けの基準を変更した方がよいかもしれない。これまではJ値が0.2以上でA級、0.1から0.2で中堅、0.1未満で初心者と分けてきたが、もう少し基準を下げて、たとえば0.75未満で初心者、それ以上で実用レベルのパワーがあると判断しても良さそうだ。

また、パワーの大きさだけでなく、測定値の安定度もヒーリング能力の階級分けに使用できると思われる。ただし、現在、装置が1台しかないため、2回目の測定までに数日から数週間の間が空いてしまい、安定度の精確な測定ができない。また同時に、色々な方法を試したいというヒーラーの要望にも答えなければならない。安定度指標の導入には、実験設備の増設や1日に何回も測定できる測定法の使用が必要である。

5.7 バイオフィトンで測定できないタイプのヒーラーは存在するか?

J値が小さいベテランヒーラーは、バイオフィトンでは測定できないヒーラーだからではないのか? すなわち、ヒーリングパワーには種類の違うものが存在するのではないのか? このような疑問が存在する。確かに、体重計で100m走を測定できないように、ある1つの測定器は1つの事柄しか測定できない。したがって、キュウリのバイオフィトンで測定できるヒーラーをタイプQとするなら、バイオフィトンで測定できないタイプXが存在する可能性がある。

残念ながら、現時点ではタイプXだから測定できないのか、初心者だから、あるいはヒーリングパワーを制御できないから測定できないのか判断がむずかしい。タイプXの存在を言うためには、新しい測定法が必要である。現在、筆者らは新しい測定法を開発中であり、その測定法を用いれば、将来、タイプQとは異なるタイプのヒーラー(タイプG)が存在するかどうか判断できると期待している。

5.8 ヒーリング作用の基本的な物理機構

ヒーリング作用の検出には、生体センサが最も鋭敏である。物理センサは今のところ、あまり敏感なものが開発されていない。では、ヒーリングは生体にどのようにして作用しているのか?

これまでにヒーリング作用を伝播する基本的物理機構として検討されたものに、赤外線がある。しかし、熱赤外線ではキュウリの発光強度の増大を説明できないことは、筆者らの実験で確認済みである^{1-3,5)}。また、Radinらの実験で¹³⁾、密閉した容器の上からヒーリングして培養細胞の増殖率が変化したとことから、赤外線が情報伝達の担

い手とは考えにくい。

磁場・電磁波は、周波数や波形・強さなど、検討すべき要素が非常に多いため、全ての条件をテストすることがむずかしい。筆者らの研究⁹⁻¹²⁾では、磁場・電磁波の可能性はあまり高くないと思われるが、磁気やベクトルポテンシャルとの関連性を示唆する実験¹⁴⁻¹⁹⁾もあり、今後、さらに研究する必要がある。

電場の可能性はあるだろうか？ 電場が生体組織の修復に作用すると報告されていることから、ヒーラーの体と実験試料との間に電気的な結合が生じ、それがキュウリに影響するかもしれない。しかし、片岡らの実験で²⁰⁾、ヒーリングパワーをいったん水溶液に「転写し」、その水溶液を白血球に与えたところ、細胞膜上のカルシウムイオンチャンネルが開いて白血球の活動が活発化したことから、単なる電場の可能性は低いと思われる。

では、意識の作用で説明できるだろうか？ 意識現象それ自体が現代科学でも十分に説明できないので、意識が特殊な働きをもっている可能性は否定できない。しかし、意識がどうやって他のものに作用するのか、そのときの物理機構が何なのか明らかでないため、これ以上の議論が困難である。なお、これまで筆者らが行ったヒーリング測定の経験からは、ヒーリングは意識の機能というよりも、肉体の持っている機能という印象が強い。

筆者らは、ヒーリングを単なる物理現象と見なして実験し、データ処理・解析してきたが、今のところ大きな問題は起こっていない。仮に「意識の作用」がどこかの段階で重要だったとしても、最終的にヒーリング現象は物質レベルで観測される。ヒーリングは、どこかの段階で必ず物理現象として姿を現す。片岡らの実験²⁰⁾からも、物質はヒーリングパワーを吸収・保持・放出する能力をもっていると推測できる。自然界に存在する既知の力のうち、生物が利用しているのは重力と電磁力であるが、能動的に利用しているのは電磁力である。生物は電磁力を介して、よくわかっていない物理存在に働きかけているのかもしれない。たとえば、現代物理学で存在を知られていながら、いまだその実態が不明のものが2つある。1つは暗黒物質で、通常物質と重力で相互作用するという以外は何もわかっていない。残る1つは暗黒エネルギーであり、これは時空のもつ性質で、これがなければ宇宙の膨張が説明できない。我々の宇宙を構成するものの密度は、通常物質5%、暗黒物質が23%、残り72%が暗黒エネルギーである。ヒーリングの物理機構として暗黒物質や暗黒エネルギーを想定するのは、問題の先送りという

点では、意識の作用を想定するのと同じである。しかし、スプーンが念力で曲がるのなら、スプーンを形作っている物質は、念力作用を受け止めるという基本的な性質を持っているはずである。ヒーリング現象を、物質、あるいは時空のもつ基本的な性質の現れと考えることで、新しい角度から研究ができるかもしれない。

6. 結 論

種々の流派のヒーラー24名を各2回ずつ測定した結果、制御されたヒーリングパワーの指標であるJ値は平均0.084となり、ヒーリング現象の存在が確認された。J値と関連した変数は年齢だけだったが、詳細な解析からJ値の増減は、被験者が実験状況にうまく順応できるかどうかや、ヒーリングのやり方に影響されると考えられた。

謝 辞

本研究の実施に当たり、24名のヒーラーの協力を得ました。また、ナチュラルスピリット社、MOA健康科学センター、MOAインターナショナル千葉の協力も得ました。御礼申し上げます。

文 献

- 1) 小久保秀之、山本幹男、河野貴美子：極微弱生物光による非接触ヒーリング作用の評価法の研究。 *Journal of International Society of Life Information Science*, **24**: 320-327, 2006.
- 2) 小久保秀之、山本幹男、河野貴美子：バイオフィトン（極微弱生物光）による非接触ヒーリングの研究。 *超心理学研究*, **11**: 21-28, 2006.
- 3) 小久保秀之、山本幹男、河野貴美子：極微弱生物光による非接触ヒーリング作用の標準評価法。 *Journal of International Society of Life Information Science*, **25**: 30-39, 2007.
- 4) 小久保秀之、山本幹男、河野貴美子：加齢によって向上する痛み抑制のスピリチュアルヒーリング能力ー極微弱生物光による非接触ヒーリング標準評価法の応用ー。 *Journal of International Society of Life Information Science*, **25**: 40-62, 2007.
- 5) 小久保秀之、山本幹男：極微弱生物光による非接触ヒーリング標準評価法の基礎的検討ーJ値の正規性、およびヒーリング効果と熱・遮光効果ー。 *Journal of International Society of Life Information Science*, **25**: 219-232, 2007.
- 6) 小久保秀之、山本幹男：ヒーラー特性およびヒーリング手法の検討ーバイオフィトンによる非

- 接触ヒーリングの研究－. *超心理学研究*, **12**: 32-39, 2007.
- 7) 小久保秀之、山本幹男：キュウリにおける極微弱生物光の発光機構. *Journal of International Society of Life Information Science*, **26**: 53-58, 2008.
- 8) Kokubo H and Yamamoto M: Quantitative measurements of non-contact healing using biophotons. *Proceedings of 51st Annual Convention of Parapsychological Association*, 348-351, 2008.
- 9) 小久保秀之、山本幹男、河野貴美子：キュウリ切片への磁気刺激作用の研究－バイオフィトンによる定量測定－. *Journal of International Society of Life Information Science*, **26**: 213-222, 2008.
- 10) 小久保秀之、山本幹男、河野貴美子：キュウリのバイオフィトン発光に与える磁気刺激と非接触ヒーリングの影響. *日本磁気医学会誌*, **33**: 19-24, 2008. [in Japanese]
- 11) 小久保秀之、山本幹男：キュウリ切片への電磁的刺激の研究－バイオフィトンによる定量測定－. *超心理学研究*, **13**(1&2): 27-35, 2008. [in Japanese with an English abstract]
- 12) 小久保秀之・山本幹男：異なる波長域で見たキュウリ切片の極微弱発光－70GHz ミリ波照射と非接触ヒーリングとの比較－. *Journal of International Society of Life Information Science*, **27**: 78-89, 2009.
- 13) Radin D, Taft R and Yount G. :Possible effects of healing intention on cell cultures and truly random events. *Proceedings of 46th Annual Convention of Parapsychological Association*, 162-183, 2003.
- 14) Takeshige C and Aoki T: Effect of artificial and human external qigong on electroencephalograms in rabbit and spontaneous electrical activity of the rat pineal gland. *Acupuncture and Electro-therapeutics Research*, **19**: 89-106, 1994.
- 15) 山本竜隆、瀬戸明、仲里誠毅、久光正：人体異常磁気現象の生物物理学的検討－特に外気によるヒト NK 細胞活性の直接賦活効果について－. *Journal of International Society of Life Information Science*, **14**: 201-206, 1996.
- 16) 青木孝志、足達義則、吉福康郎、吉田勝志：DC 干渉拮抗場の照射が皮膚電気活動に及ぼす影響. *Journal of International Society of Life Information Science*, **22**: 349-361, 2004.
- 17) 青木孝志：シールド線無誘導コイルが発生する干渉相殺場が皮膚電気活動およびカラゲニン浮腫に与える影響. *Journal of International Society of Life Information Science*, **19**: 339-350, 2001.
- 18) 青木孝志、吉福康郎、足達義則：ゲージ場が生体に与える影響. *Journal of International Society of Life Information Science*, **17**: 385-391, 1999.
- 19) 青木孝志：ゲージ場および弱磁場が皮膚表面電気伝導に及ぼす影響. *Journal of International Society of Life Information Science*, **16**: 324-331, 1998.
- 20) 片岡卓治、杉山範和、松本密蜂：ヒト好中球に対する Qi-gong vital energy の効果. *Journal of International Society of Life Information Science*, **15**: 129-137, 1997.